監修の序

「今回のＴＨＡは再置換だったから，プライマリーの前方法じゃなくて，別皮切の後方アプローチで手術してあるからよろしく」と言われたセラピストは，「はて，たくさんリハビリ対応している慣れたTHA患者だけど，いつもと手術法が違うと言うことは，どこをどうやって展開してあって何に注意がいるのかな……」と迷うこともあるのではないでしょうか？

組織を展開し，骨を露出し，手術を完遂する整形外科医は，医学部学生時代から実際の解剖をご遺体にて体験しています．しかしセラピストは在学中座学でたいへんな情報量を勉強する傍ら，実際の手術に手洗いして参加することや，自らメスを持ち解剖を行った経験は少ないと認識しています[1)]．

体表解剖を含め筋とその機能に精通するセラピストも，多くは手術における実際の展開と，ダメージを受けている筋腱や軟部組織についての十分なイメージができているとは言いがたいのではないでしょうか？

本書「ひと目でできる整形外科術後リハビリテーション　下肢　－術式理解と豊富な画像で導くアプローチ」は本邦でも名だたる整形外科の先生に術式について詳細な解剖を交えてご執筆いただき，さらには各手術について精通されているセラピストの先生に，実際のアプローチの方法と注意点について，それぞれペアでご執筆いただきました．このようなコンセプトの書籍は他に例を見ないのではないかと思います．

取り上げている手術も，人工関節，骨切り術，鏡視下手術，そして外傷まで，きわめて多岐にわたって網羅しております．

本書を片手に，「この患者さんの術式では，この点について注意すればよいですか？」とカンファレンスできるような多職種連携の一助になれば，関係者全員，これに勝る喜びはありません．

本書籍が，「上肢」編とともに，各手術の術後の理学療法に携わるすべての医療者の手元に届き，日常診療の一助になることを祈念してやみません．

2026年10月

名古屋学院大学リハビリテーション学部
渡邊宣之

文 献

1）一般社団法人日本基礎理学療法学会：人体解剖学実習に関するアンケート調査報告書
https://www.jspt.or.jp/jsptf/tyousa/kaibougakuanke-to.html（2026年10月閲覧）

編集の序

私が本書にかかわる機会は，共同編集者である中宿伸哉先生からお声掛けいただいたことで得られました．羊土社編集部の皆様から読者の声を伺い，セラピストを取り巻く環境が「常識が非常識で，非常識が当たり前」になっている現状を知りました．それは，「手術（術式）に関する知識に乏しく，禁忌がわからない」，「術侵襲を受ける組織がわからないため，どのようにアプローチすべきか不安である」，「手術に関する知識不足から，医師と対話ができない」といった，整形外科手術の知識不足に起因する「不安・怖さ・コミュニケーション不足」によるものです．これらはチーム医療の前提を揺るがしかねない深刻な問題であり，私自身も実技講習会などの講師を務めるなかで実感し，同様の声を耳にすることもありました．本書によって，このような状況が覆り，「常識が常識に」なり，「強固なチーム医療のもとで良好な術後療法が展開されること」を願っています．

本書は，豊富な図による視覚的理解と簡潔明瞭な文章で，すぐにでも臨床で活かせる内容であることが特徴です．このコンセプトには，ご執筆を担当いただいた整形外科医とセラピストの先生方にも深く共感いただき，試行錯誤を重ねながら多くの工夫を凝らしていただきました．このように，整形外科医とセラピストがタッグを組んで同じテーマや術式に取り組み，双方の専門性を活かして紙面を構成している点が，本書の大きな特徴です．また，上肢編と下肢編にわたり，これほど豊富なテーマで数多くの整形外科医とセラピストが共同執筆していることは珍しく，画期的な試みであると自負しております．本書を職場の治療台の傍らに常備いただき，「悩んだり，困ったり，気になったり」した際には，すぐにページを開いてご活用いただくことをお勧めいたします．

本書が，悩めるセラピストの道標となり，良好な術後療法が展開され，患者さんの笑顔と喜びにつながることを心より願っております．最後になりますが，ご執筆いただいた整形外科医およびセラピストの先生方，ご監修いただいた山崎哲也先生と渡邊宣之先生，共同編集者の中宿伸哉先生，そして羊土社編集部の鈴木美奈子様，阿部壮岐様，大谷香緒様，髙倉康平様に，この場を借りて深く感謝申し上げます．

2026年10月

医療法人社団健将会 帝都メディカルクリニック西新井駅前院
山本昌樹

編集の序

整形外科領域における術後リハビリテーションで最も大切なことは，手術によって得られた治療効果を最大限に引き出し，良好な機能回復へつなげていくことです．治療成績は，手術に対する正しい理解のうえに成り立っていると言っても過言ではありません．

前職である吉田整形外科病院に在籍中，恩師であり現理事長の山田高士先生のご厚意により，若い頃から数多くの手術を見学する機会をいただきました．術野に展開された組織を前に，「この処置を行ったのであれば術後には何を制限すべきか」「この組織を修復したのであれば，いつから，どの程度まで負荷を許容できるのか」といった議論を重ねた経験は，私の術後リハビリテーションの土台になっています．その経験を振り返るたびに，術後のリハビリテーションは手術終了後にはじまるものではなく，術者の意図を理解した瞬間，つまり手術室からすでにはじまっているのだと感じずにはいられません．

術後リハビリテーションを行ううえで必要となる情報は，「どの組織が損傷しているのか」「手術によってどのような侵襲が加えられたのか」「損傷組織に対してどのような処置を行ったのか」という三点に大きく集約されると思います．これらを正確に把握することによって，術後に実施すべき介入と慎重に扱うべきことが明確になります．すなわち術後のリハビリテーションとは，必ずしも決められたプロトコルや経験則のみに頼って進めるものではなく，組織の修復過程，手術侵襲，手術による組織の修復や再建方法を基盤として構築される，きわめて論理的かつシステマティックな医療とも言えます．手術方法を理解することは，適切な術後リハビリテーションを行うための出発点であると同時に，医師との共通認識をつくり，連携を深めていく基盤にもなるはずです．

本書は，整形外科医とセラピストがそれぞれの専門性をもち寄り，手術から術後リハビリテーションまで一貫した内容として一冊にまとめることをめざしたものです．整形外科医の先生方には，各術式の目的，組織への侵襲，損傷組織の修復・再建の方法など，術後リハビリテーションに必要な視点を踏まえて解説いただきました．セラピストの先生方には，術後管理において「何をしてよいのか」「何に気をつけるべきか」という臨床上の要点に絞り，日常診療でそのまま使える形に整理していただいています．本書が，術式の理解から臨床応用までを一貫して学ぶことのできる実践書となれば幸いです．

医療を取り巻く環境がますます高度化・専門化していくなかで，より質の高い医療を提供するには，それぞれの職種が互いの専門性を理解し合い，共通の視点で患者さんと向き合うことが，以前にも増して大切になっています．本書が整形外科医とセラピストの相互理解を深める一助となり，よりよい連携を築くための一冊として，多くの臨床家の手元で活用されることを心より願っております．

2026年10月

徳島文理大学保健福祉学部理学療法学科
中宿伸哉